

受傷後7～10日目以内に同様の処理を行なうもので、この場合熱傷創部に感染が存在しているため、手指関節の機能障害が一部にみられた。

(3) late debridement

受傷後2～3週間を経過し、肉芽創が形成された時期に外科的処理を行なった症例群であり、治療後の状態としては手指関節障害が強くみられ、それらの予後も余り良くなかった。

2. 陳旧群

熱傷が癒痕治療したもので、少なくとも、1カ月以上を経過している症例群である。幼小児では癒痕拘縮がたとえ一時的に高度に認められても、外科的治療により手指機能は保存される症例が多くみられたが、成人では手指関節の障害を残す症例が多く認められた。

以上の症例観察結果より、手部熱傷では、D.D.B.以上の深部熱傷例に対しては外科的処理をできるだけ早期に行なうことが重要であり、それらの手術の予後もきわめて、良い結果を得ることができたことを強調した。

8. 形成外科領域における先天性奇型例

(第1報) 四肢の奇型について

(形成外科)

○中谷 親弘・平山 峻・林 道義・野崎 幹弘・若松 信吾・上村 隆志

昭和50年5月、東京女子医大に形成外科が開設されて以来、1年7カ月間に、総数374例の先天性、奇型症例を取り扱った。これらは総来院数の約19%に当り、年令的には乳幼児患者が最も多数に見られた。われわれが形成外科で取り扱っている先天性奇型中、特に四肢の奇型では、多指症は21症例(5.6%)、合指症は20症例(5.3%)と多く、四肢の奇型の大多数を占めていた。

今回はこれらの多指症、合指症およびその他の代表的奇型についてのわれわれの治療方針並びにそれらの治療結果を報告した。

質問 (心研小児科) 高見沢 邦武

先天性心奇型を伴う患児に多指症、合指症等を伴うことも時々みられます。乳児期よくすぐ発見されるものですので、手術時期はいつ頃が適当かご教授下さい。

応答 (形成外科) 中谷 親弘

合指症の手術時期、1才半～2才の時期に手術したい。しかし最近の傾向としてはより早期の手術でもよい結果を得ている。多数の症例では長期間かかるため、手術を早期におこなっている。

質問 (内科) 竹内 富美子

沢山の形成手術成功例をみせて頂きありがとうございます。この患者およびその両親の方などに先天性異常の原因と考えられるような代謝異常や血族結婚などについてお気付きのことがあれば、教えていただきたいと思えます。

応答 (形成外科) 中谷 親弘

多指症の原因について

当科のアナムネーゼでは特に不明である。文献的にも不明である。著しい奇形(原因の明確なもの)は当科の症例数は少ない。

9. 乳幼児睾丸腫瘍の2症例

(外科)

○村田 順・織畑 秀夫・太田八重子・倉光 秀麿・鈴木 忠・馬淵 原吾・斎藤 正光・金 哲熙・前田 潤子・片山 修・赤羽根 巖・中谷 雄三

本教室において、最近2例の小児睾丸腫瘍を経験した。1例は胎児性癌であり、1例は奇形腫である。小児睾丸腫瘍は大部分は胎児性癌であり、全小児悪性腫瘍の約2%を占める。治療法について確立された方法はない。放射線療法についても、効果なしとするものと有意とするものがある。自験例については、後腹膜転移、肺転移などが認められなかったため、高位除睾術、後腹膜リンパ節郭清のみとし、放射線療法、化学療法は行なっていない。

質問 (第二病院外科) 山崎 靖夫

このような症例に対して化学療法の適応はどのように決めているか。

応答 (外科) 村田 順

後腹膜リンパ節転移を認めないときは、化学療法、放射線療法は行なわない。

質問 (放射線科) 大川 智彦

第2例(Embryonal Cell Ca)の両側リンパ節が初診時触知されているが、その程度(Niaorb)とその処置はどうすればよいか。

応答 (外科) 村田 順

特に本疾患と関係なかった。

10. 小児期感染性心内膜炎(I.E.)の合併症について

(心研小児科)

○高見沢邦武・松岡 優・津田 哲哉・横山 修三・河村 司・長井 靖夫・安藤 正彦・高尾 篤良

感染性心内膜炎は比較のまれで、一般病院での頻度は